

第3章 自然的特性

第1節 地理的特性

大江町は、山形県内陸部の中央に位置する村山盆地の南西端に広がる。最上川が、長井盆地と山形盆地との境界となる峡谷部を通り抜けて、山形盆地に流れ出た谷口に立地したのが、左沢の集落である（図3-1）。

左沢から上流の最上川は狭隘な峡谷部を通過して置賜盆地へと至ることから、左沢の河岸は川船が運ぶ物資の積替え地点ないし川船そのものを小型のものに転換する地点として下流部の大石田（大石田町）と同様に重要な役割を有していた。そのために、船だまりや米沢藩の「舟屋敷」などの特徴的な河岸景観が形成されるに至った（図3-2、第4章図4-5、図4-6参照）。

左沢の河港は、村山盆地に最上川が流れ出て、左沢楯山城の位置する山塊にぶつかって流れが急におだやかになる淵の部分に立地しており、一定の水深も得られたことから船だまりとしては格好の場所となったものと想定される。

そして、左沢で最上川に注ぐ支流の月布川の上流に沿って、細長く流域に展開する集落群が大江町を形成しており、最上川の本流と支流をつなぐ形で行政区画が成り立っていて、ひとつのまとまった地理的空間を形成しているといえよう。

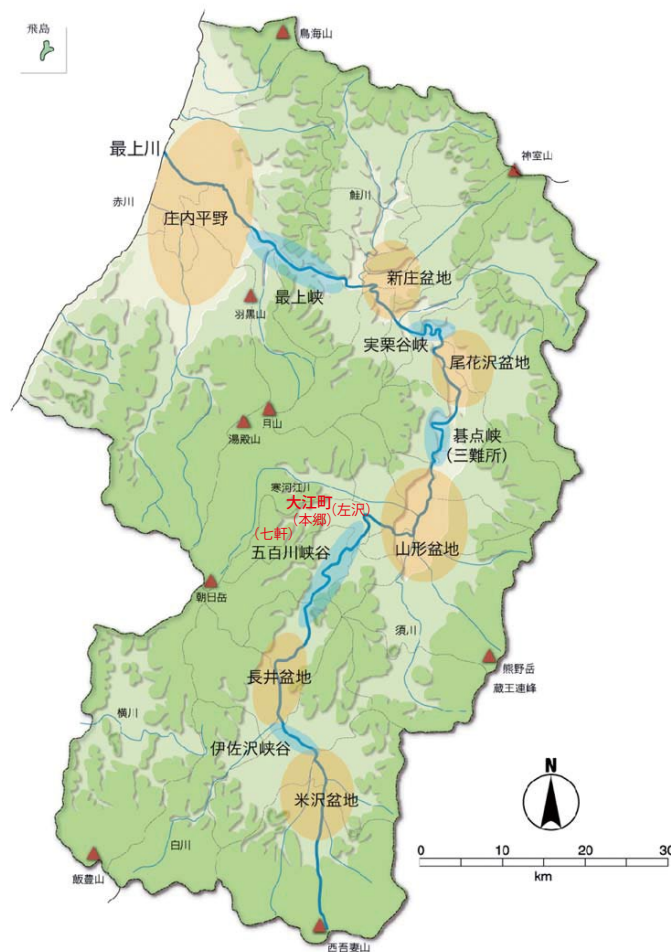


図3-1 最上川と大江町の立地（『最上川流域の文化的景観調査報告書』より転載、地名を加筆）

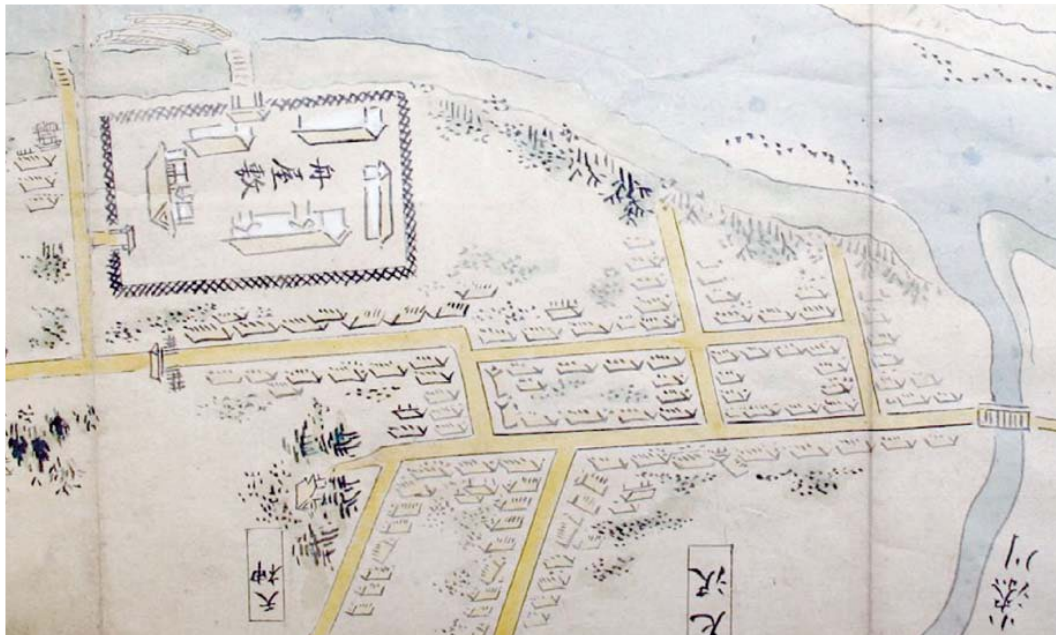


図3-2 「羽州川通絵図 自米沢正部最上左沢」(山形県立博物館所蔵、部分 『「最上川流域の文化的景観」調査報告書』より転載)



図3-3 楯山付近の最上川の流れ

次頁に掲載した大江町の鳥瞰図によれば、月布川に沿う低地と、その背後にみられる緩斜面の丘陵部、そして、奥に展開する急峻な山間部との対比が、きわめて明瞭となる（図3-3）。

一方で、集落群をつなぐ街道がみられる。羽州街道や六十里越街道の脇往還として、枝道がいくつも存在していたし、水運の発展にともなって河岸から村々へ物資を運ぶ街道が形成された（図3-2）。

河川に沿う東西の街道に対して、峠を越えて南北を結ぶ街道が複数存在するのが特徴的といえる。朝日山地のすぐ東側を断層線に沿って、置賜盆地の白鷹町方面から峠を越えて、古寺（小寺）集落を通り、地蔵峠を越えて大井沢へと至る街道は古い出羽三山信仰の道であり、中世に大井沢大日寺を中興した道智上人が開いたと伝えられることから、道智道と呼ばれる。

さらに、もう少し東側に、朝日町の大沼浮島から峠を越えて小清から貫見へと至る街道があり、この道もまた出羽三山への参詣路として利用された。大沼浮島は朝日山地の山岳信仰と関わりがあるとされる聖地であり、三山参りの旅人の多くが立ち寄った。彼らは貫見から峠を越えて、西川町の入間へと抜け六十里越街道へ合流して、三山参りの旅を続けたのであった。

なお、安土桃山時代に造られたとされる朝日軍道は、置賜と庄内の上杉領を直結する道路であった。しかしながら、平和な徳川の世になって、最上川水運が置賜と庄内を結び、朝日軍道はその役割を終えた。

近代においては、最上川水運にかわって、鉄道の左沢線で山形市と結ばれ、左沢と中郷間の最上川に橋が架り、現代には最上橋（新最上橋）が完成して陸上の道路においても左沢へのアクセスが容易になった。

このように、最上川とその支流、それらに沿う街道群と交差する形で峠を越える街道群によって町場と村々が結ばれる景観が成立したのであった。

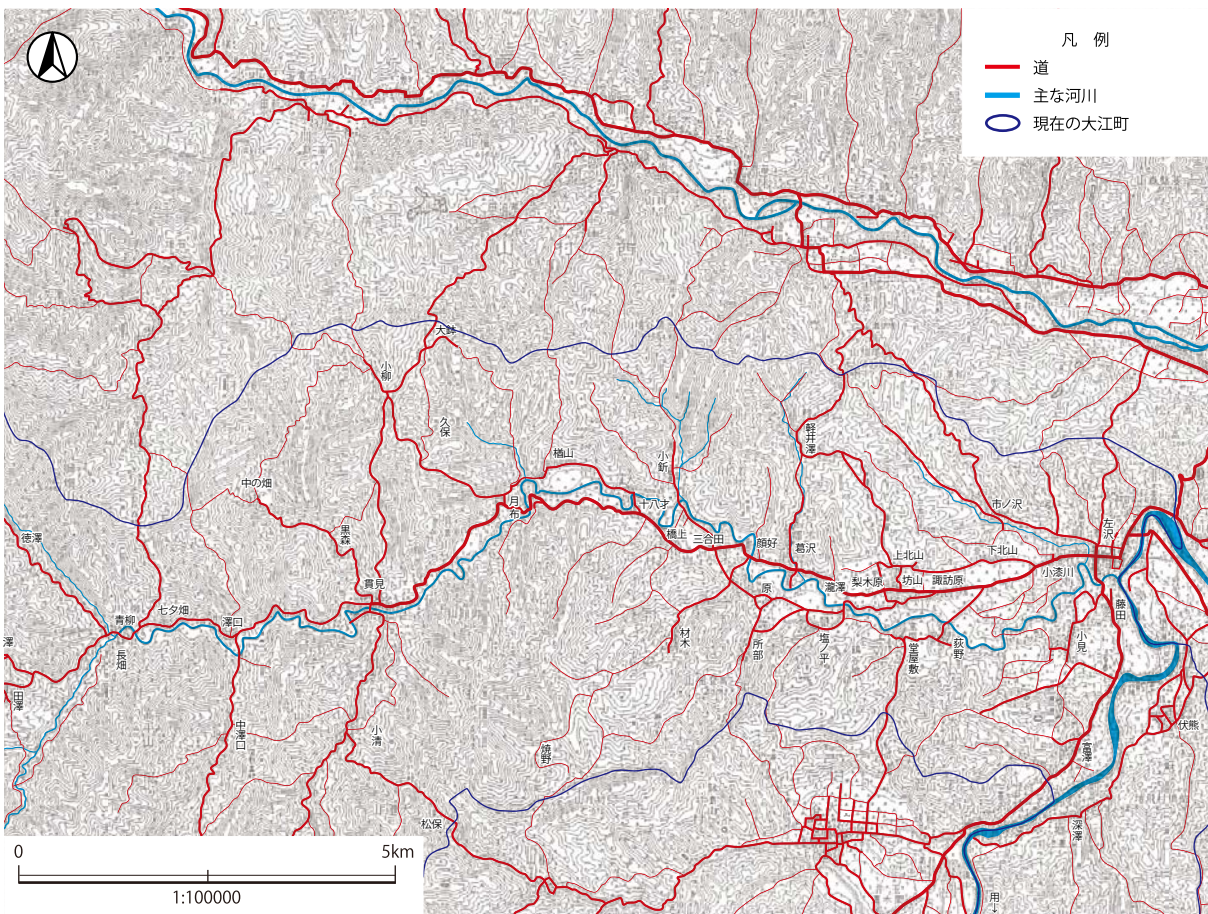


図3-4 大江町の集落と街道（大日本帝国陸地測量部 明治43年測量5万分の1地形図「左沢」を加工）

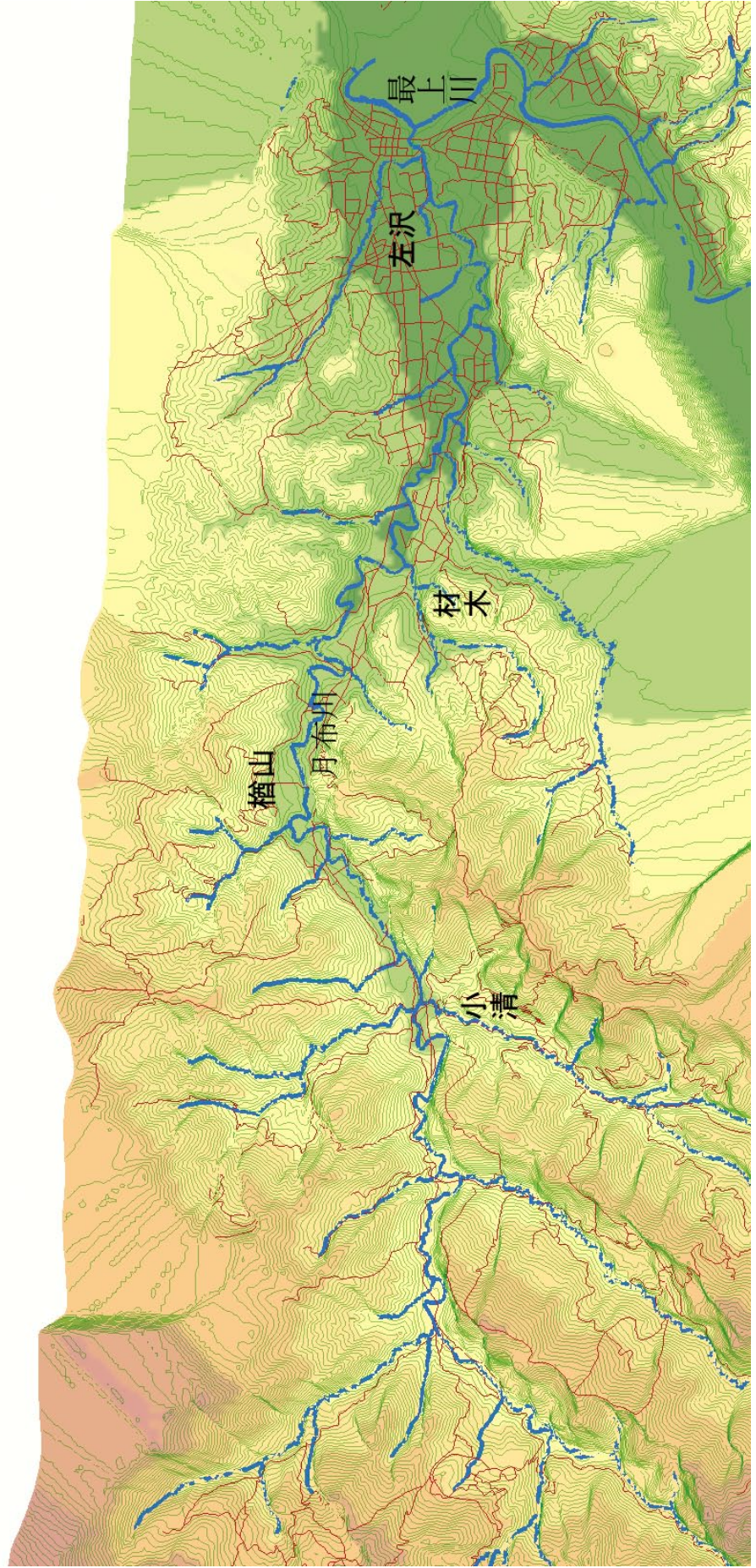


图 3-5 大江町鳥瞰図 (作成：山形大学農学部 准教授 渡辺 理絵)

第2節 地形と地質

大江町の地形は、大きく三つに区分される。月布川源流部に位置する朝日山地の高山帯、そしてその中流部に広がる丘陵部、そして下流部に立地する河岸段丘部に分けられる。町村合併以前の七軒村は高山帯と丘陵部、そして本郷村と左沢町は河岸段丘部を占めていたといえる。いわば、旧町村は地形区分と対応した形で成立したものであった。そして、この河岸段丘面上と丘陵部で、特産物の生産が展開したのであった（図3-6）。

地質からみると、朝日山地は中生代の花崗岩類から成る古い地質であり、丘陵部は第三紀に形成された堆積岩類から成り、河岸段丘部は第四紀の洪積世から沖積世にかけて河川の侵食・堆積作用で形成されたものである（図3-7）。

最上川が月布川と合流してすぐ下流で流路を大きく曲げたところに楯山があり、その麓は最上川の攻撃斜面となっているために侵食によって急斜面が形成されたことから、天然の要害として中世城館としての左沢楯山城が成立するところとなった。この山城からは、眼下に左沢の町場を見下ろすことができ、いまでも日本一公園の名勝として知られる。

また、月布川の氾濫原に成立した左沢の町場の、すぐ下流の最上川左岸で急崖を形成する楯山麓に位置する河川敷の景勝地である百目木にはかつて茶屋が設けられた。茶屋ではすぐそばに設けられた築場でとれる魚が提供されてにぎわったものであった。百目木を流れる最上川には中洲「なかがわら中川原」があり、この中洲は左沢と中郷村（寒河江市）との間で境界をめぐる争論が生じた場所であった。

一方、第三紀の地層からなる丘陵地域には、至るところに地すべり地形が形成されている。この地すべりは、時には家屋を傾かせたり、耕地を流出させたりもしてきたが、すべり面の粘土層は保水力があるために、水田としての利用が可能であり、山間部における稲作適地を提供してくれるメリットが存在する。

それに加え、山間部にあつて、地すべり地帯は比較的緩斜面であること、湧水がみられることから、集落立地にも適しているのが、古くから集落が形成されてきたのであった。

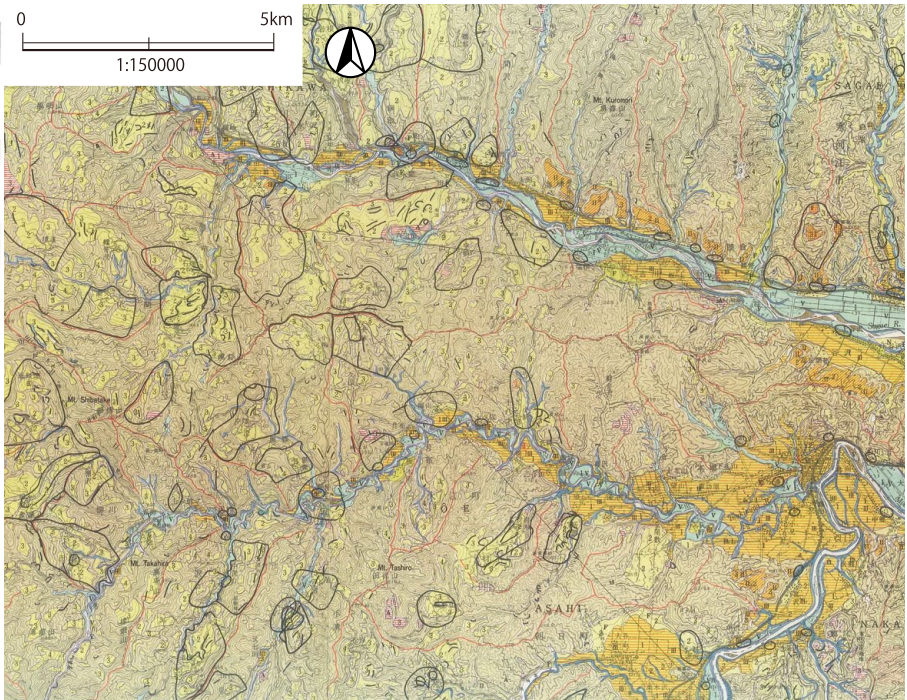
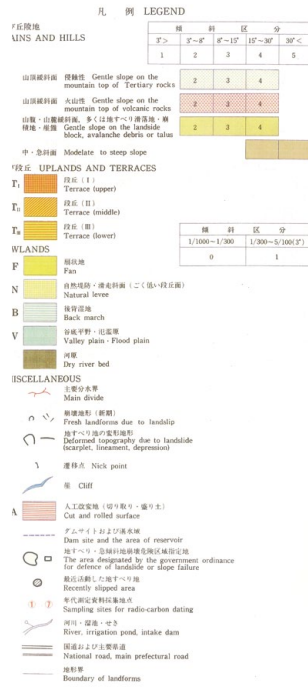


図 3-6 大江町の地形（『土地分類基本調査 左沢 5万分の1 高度調査』「地形分類図」を転載）

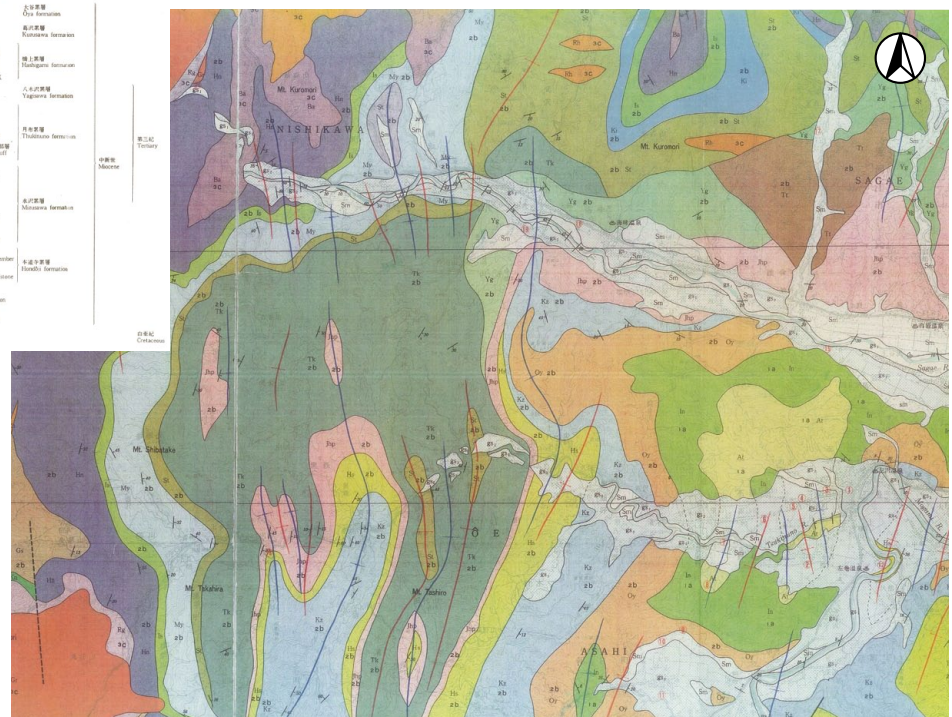


図 3-7 大江町の地形（『土地分類基本調査 左沢 5万分の1 高度調査』「表層地質図」を転載）

第3節 動植物と生態系

朝日山地は、日本でも有数のブナ帯がみられ、標高 600 m から 140 m あたりまで広がっている。月布川中流部の丘陵部には、クリ・ケヤキ・ミズナラ・コナラなどの落葉広葉樹林が広がっているが、これらの雑木林は薪炭林として利用されてきたのであり、枝を落としては再利用されたために、いわゆる萌芽林の形成がみられる。

それに加えて、桐や漆、楮、栗などの有用樹木も半栽培的な位置づけで生育しており、それらの樹木から木蠟や和紙などが生産され、特産品となった。

しかし、第二次大戦後は植林が進み、スギやカラマツの人工林が急増した。とりわけ、月布川の中上流域では、積雪が多いことから果樹への転換が困難であるために、スギの人工林が卓越している。

それ以前に、丘陵部で伝統的に行われてきた焼畑農業が、特産物の商品作物生産を支えてきたのであり、青芋もそのひとつであった。大江町域の特産であった青芋は、イラクサ科の多年性植物（カラムシ）で、カラムシは日本では古来から植物繊維をとるために栽培されてきた。

また、丘陵部の地すべり地帯には棚田も盛んに造成されていた。

これらの豊かな植生を背景として、多彩な生態系が存在する。野生生物としては、ツキノワグマ・カモシカ・サル・ウサギ・アナグマなどが生息しており、山村に暮らす人々の生活を支える狩猟の対象ともなってきた。いまは、その暮らしぶりも大きく変わったものの、かつては、いわゆる「マタギ」と呼ばれた狩猟民が朝日山地の山麓の村々に広く存在したものであった。なかでも、熊の胆嚢は「熊の胆」と呼ばれる万能薬として重宝され、高値で取引された。

また、鳥類も数多く生息し、イヌワシやハヤブサなどの生物ピラミッドの頂点に位置する大型肉食鳥類の生息も確認されてきた。



クリ



ケヤキ



コナラ



ミズナラ

- 植生図 凡例**
- 凡例色 植生図凡例番号 統一凡例番号 統一凡例名
- 5. 110100 チシマザサ-ブナ群団
 - 7. 150100 アカマツ群団 (IV)
 - 8. 160101 ジュウモンジシダ-サワグルミ群集
 - 9. 160400 ケヤキ群団 (IV)
 - 10. 170200 ハノキ群団 (IV)
 - 11. 180100 ヤナギ高木群団 (IV)
 - 12. 180200 ヤナギ低木群団 (IV)
 - 13. 190000 岩角地-風衝地低木群団
 - 16. 200101 ヒメヤシブシクニクツギ群団
 - 17. 220100 ブナ-ミズナラ群団
 - 19. 220501 オウチャウジザクラ-コナラ群集
 - 20. 221200 オニグルミ群団 (V)
 - 21. 230100 アカマツ群団 (V)
 - 25. 250200 ススキ群団 (V)
 - 26. 260000 伐採跡地群団 (V)
 - 30. 470501 ツルコシ群集
 - 31. 470502 オギ群集
 - 33. 470600 ヒルムシロクラス
 - 35. 540100 スギ-ヒノキ-サワラ植林
 - 36. 540200 アカマツ植林
 - 40. 550000 竹林
 - h. 560100 ゴルフ場-芝地
 - g. 560200 牧草地
 - f. 570100 路傍-空地雑草群団
 - o. 570101 放棄畑雑草群団
 - e. 570200 栗樹園
 - a. 570300 雑草群団
 - b. 570400 水田雑草群団
 - d. 570500 放棄水田雑草群団
 - k. 580100 市街地
 - l. 580101 緑の多い住宅地
 - L. 580300 工場地帯
 - m. 580400 造成地
 - w. 580600 開放水域
 - r. 580700 自然裸地

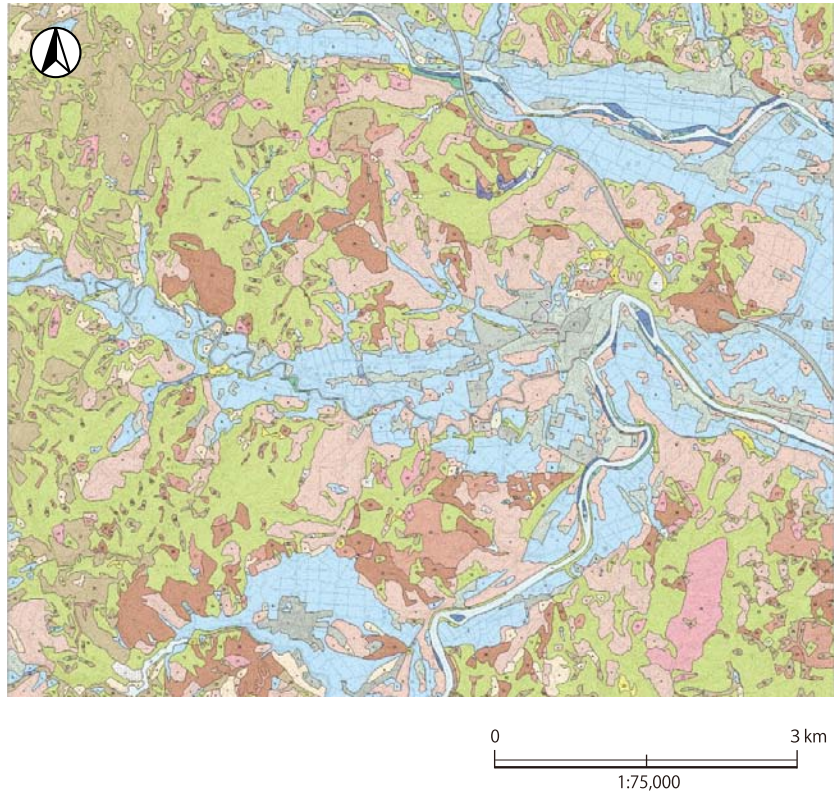


図3-8 大江町東部の植生（環境省自然環境局生物多様性センター「第6回・第7回自然環境保全基礎調査 植生調査 2次メッシュ情報 左訳」（2000年作成、1998年撮影航空写真を植生図の判読に使用）を転載）

- 植生図 凡例**
- 凡例色 植生図凡例番号 統一凡例番号 統一凡例名
- 3. 070201 チシマザサ群団 (II)
 - 5. 110100 チシマザサ-ブナ群団
 - 6. 140300 クロベ-キタゾヨビ群団
 - 7. 150100 アカマツ群団 (IV)
 - 8. 160101 ジュウモンジシダ-サワグルミ群集
 - 9. 160400 ケヤキ群団 (IV)
 - 11. 180100 ヤナギ高木群団 (IV)
 - 16. 200101 ヒメヤシブシクニクツギ群団
 - 17. 220100 ブナ-ミズナラ群団
 - 18. 220103 オオバロモジ-ミズナラ群集
 - 19. 220501 オウチャウジザクラ-コナラ群集
 - 20. 221200 オニグルミ群団 (V)
 - 21. 230100 アカマツ群団 (V)
 - 25. 250200 ススキ群団 (V)
 - 26. 260000 伐採跡地群団 (V)
 - 27. 470100 ツルコケモ-ミズゴケクラス
 - 28. 470200 スマガヤオウダ
 - 30. 470501 ツルコシ群集
 - 33. 470600 ヒルムシロクラス
 - 35. 540100 スギ-ヒノキ-サワラ植林
 - 36. 540200 アカマツ植林
 - 37. 540700 カラマツ植林
 - g. 560200 牧草地
 - o. 570101 放棄畑雑草群団
 - e. 570200 栗樹園
 - a. 570300 雑草群団
 - b. 570400 水田雑草群団
 - d. 570500 放棄水田雑草群団
 - k. 580100 市街地
 - l. 580101 緑の多い住宅地
 - m. 580400 造成地
 - w. 580600 開放水域
 - r. 580700 自然裸地

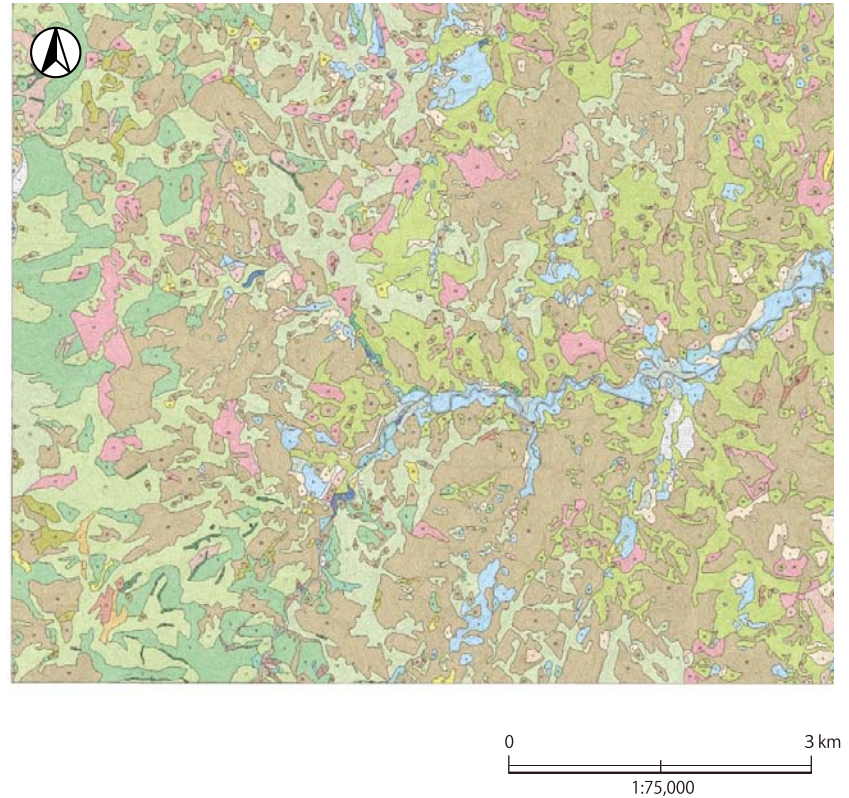


図3-9 大江町西部の植生（環境省自然環境局生物多様性センター「第6回・第7回自然環境保全基礎調査 植生調査 2次メッシュ情報 貫見」（2000年作成、1998年撮影航空写真を植生図の判読に使用）を転載。）



ウルシ



青苧の自生地
(小針)



青苧

一方、魚類の生息も豊富で、月布川の上流部ではイワナが、中流部から下流部にかけてはマスやヤマメ、ウナギなどが生息しており、マスを捕獲するためのヤナも存在した。

それに対して、最上川の本流部には、サケ・マス、ヤツメウナギなどを捕獲するためのヤナが存在した。先述の百目木など、築場のそばには茶屋が設けられたこともあり、そこでは、新鮮な魚類が提供された。

また、月布川の合流地点よりすぐ上流に若宮^{わかみや}築が存在した。この築の創設は江戸末期から明治前期とされ、年間漁獲高は鮎が最高で400貫、クキ（瀬つきとも言った）は400貫以上とれ、鱒は560本、鮭は120本で、鰻・鯰は雑と呼んでいて、鮎が250～300貫捕れば経営が成り立ち、それ以上の時は築の補修のために積み立てた。山形に運ぶ魚は鮎だけだった（柴田 2010）。

なお、山形県がまとめた『レッドデータブックやまがた』によれば、動物では、カモシカ・ホンドモモンガ・オコジョ・イムワシ・ハヤブサ・チゴハヤブサ・オオルリ・アカシヨウビン・ホシガラス、植物では鳥原御田（鳥原山）の湿原で発見されたホロムイソウなどが希少生物として掲載されている。



アユとヤマメ（月布川）

第4節 河川と水利

大江町は、最上川の本流と、それに合流する月布川の河谷に沿う形で、まとまった地理的空間が構成されている。最上川は、世界でも有数の豪雪地帯を流域に有し、その雪解け水は春から秋にかけての長期間にわたり、豊かで安定した水量を保証している。

最上川は日本三大急流のひとつに数えられたりもするのであるが、実際には河口の酒田（酒田市）から100 Kmほども遡った上流の左沢の標高は100 m余りで、単純に計算すれば、1 km遡るごとに1 m標高があがるということになり、けっして急流であるわけではない。盆地の間に位置する峡谷部において、上流からの水圧のために急流が部分的にみられるにすぎない（図3-5）。

その峡谷部は、下流の庄内平野から最上盆地までの間の最上峡、最上盆地と村山盆地の間の三難所を含む峡谷、そして左沢から上流の置賜盆地の間の峡谷があり、とりわけ水量の少なくなる区間である峡谷部においては、人工的に舟道が開削されたという。

さらに、上流にさかのぼるほど、大きな船が通行できなくなるので、河港が船の中継基地として、また積み替え基地として倉庫が立地するなどして繁栄した。左沢は大石田とともに、重要な中継ぎの河港として知られた。

ところで、ヨーロッパのライン川やドナウ川で、今なお河川水運が盛んに利用されているのは、大陸的にゆるやかに流れる大河で、河川勾配が緩傾斜であることと、流量が豊富で安定しており、河川係数が小さいためである。

この河川水運にとっての有利な条件が、日本で最もあてはまる河川のひとつが最上川であるといえよう。その自然環境を最大限に活用し、さらに狭窄部の難所においては人工的に流路を掘り抜けて、安全な航路を確保したことによって、最上川水運は安定的に利用されるようになった。冬場は渇水期で水量が減少するが、連動していた日本海海運も冬の荒れた海を航海することはなかったために、最上川水運も利用する必要はなく、冬

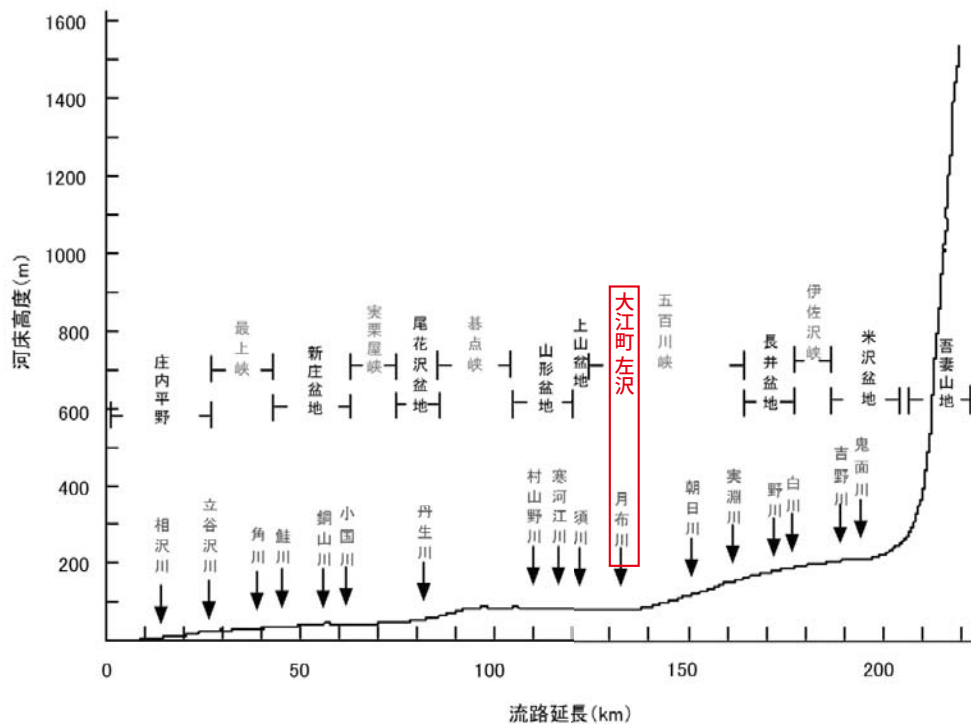


図3-10 河床断面図（『河川環境資源の活用と地域活性化に向けた活動（最上川流域において）』から転載、「大江町左沢」加筆）



五百川峡谷を流れる最上川
(用)



左沢付近の最上川
(大江町左沢)



村山盆地に流れ出る最上川
(左沢下流 寒河江市中郷から)

場のわずかな物資輸送は陸路が使われたものと想定される。

その一方で、農業面で、最上川本流の水を農業用水に利用することは困難であった。大江町においては、最上川の本流は最も低いところを流れているのであるが、上流部はすぐに溪谷となっているために、用水口を確保することは困難であり、農業用水に利用することは不可能であり、元来は大江町内には水に恵まれない地域が多くみられ、雨乞い信仰も盛んであった。

そのために、支流の月布川から取水する堰が江戸時代に築かれ、広い面積の水田が開田されるに至った。天保9年（1838）の「左沢御領内御絵図」には、月布川を水源とする北堰をはじめ、^{ならやま} 榎山堰、^{ところぶ} 所部堰、和合堰、四野沢堰、中郷本田堰、水口堰が描かれており、さらに用水池と思われる溜池や湖沼もいくつか描かれている（図3-7）。

現在は、月布川から取水する月布堰、南堰、北堰、^{おぎの} 荻野堰、月布川支流から取水する半沢堰、所部堰、^{くずさわ} 葛沢堰が存在し、これらの水源が、水田における稲作農業を支えてきたのであった（図3-6）。

また、月布川には、「へんぐり」と呼ばれる曲流した旧流路が貫見・月布や荻野に残されており、これらの曲流部は水害の原因となったり、交通の難所でもあったために、ショートカットされて新しい流路がつけられている。



北堰（榎山）



「へんぐり」（貫見）

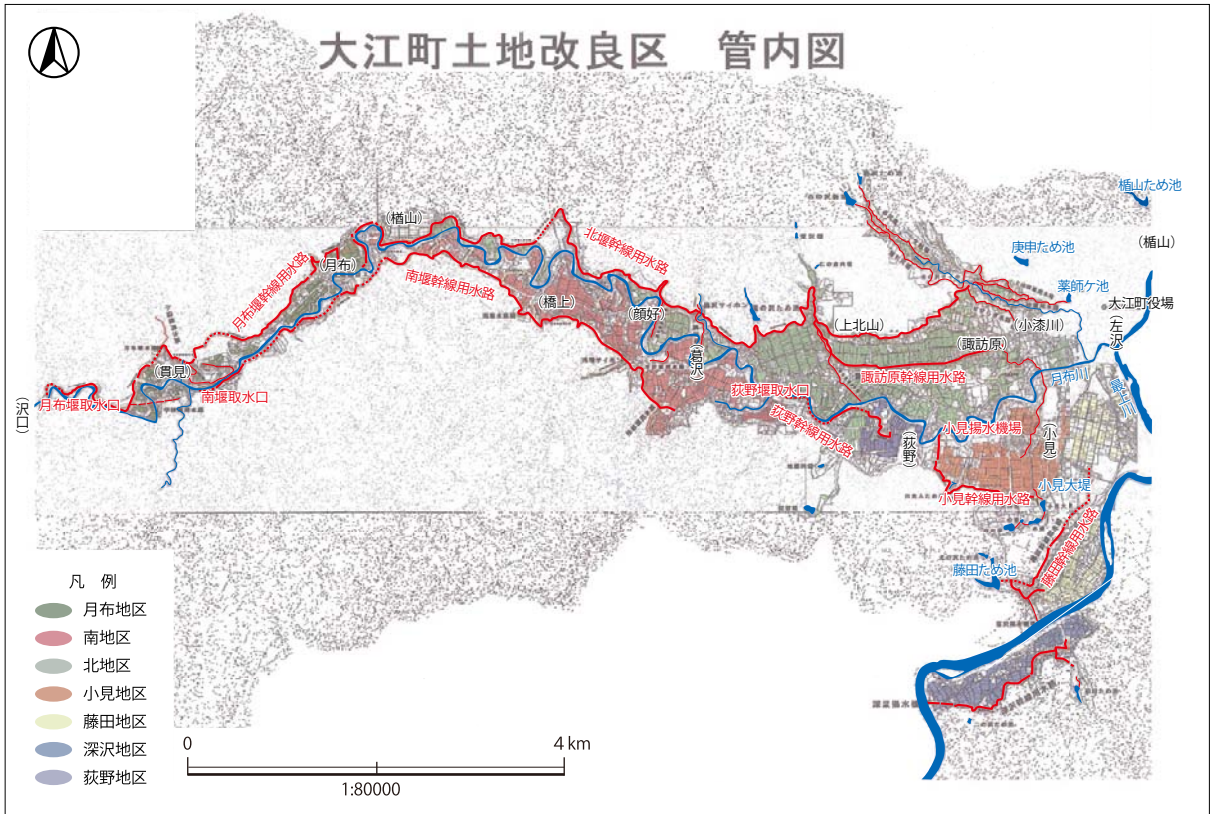


図3-11 現在の大江町内の堰（大江町土地改良区提供「大江町土地改良区管内図」を加工）



図3-12 近世の絵図面に描かれた堰（下北山菊地家所蔵「左沢御領内御絵図」より）

第5節 気候と災害

山形県内陸部に位置する大江町は、豪雪地帯ではあるが、夏場は高温多湿で日照時間にも比較的恵まれた気候下であり、この気候環境によって特産の農産物を栽培することができた。

とりわけ、山間部では、豪雪に見舞われることがしばしばである。現在の気象観測地点は左沢にのみ存在し、その観測データは、図に示されたとおりである（図3-9）。左沢では、最深積雪量が1メートルを超える年は稀であるが、昭和28年の七軒村勢要覧によれば、旧村役場の置かれていた沢口では、1.3mほどの最深積雪が観測されており、山間部の積雪の多さを具体的に知ることができる。支流に沿う山間部の最奥部に位置する^{たのさわ}田ノ沢では、2m前後の積雪がみられ、高齢化にともなう雪下ろしの困難さが深刻になりつつある。



左沢市街地の積雪



小清の積雪

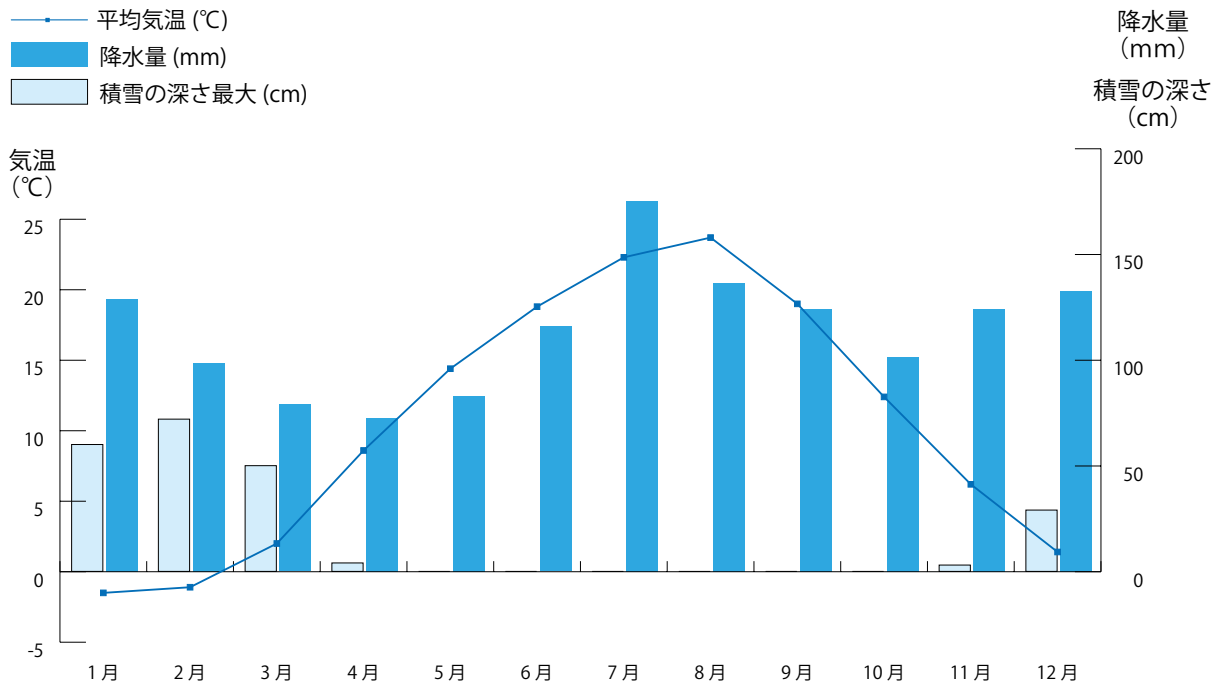


図3-13 左沢観測所における最深積雪量（山形地方気象台左沢観測所観測、統計期間1981年～2010年（30年）
気象庁ホームページ：<http://www.jma.go.jp/jma/menu/obsmenu.html>より）

災害としては、かつて羽越水害をもたらした最上川の本流の洪水災害が想定され、被害状況を予測したハザード・マップが作成されている。左沢の伝統的な町場は微高地に立地しているために浸水被害の可能性は少ないが、新たに市街地化された最上川本流に沿う低地では浸水の被害が予想され、月布川の旧河道沿いでも浸水被害が予想されている（図3-9）。

また、第三紀の地質が広がる丘陵部では、地すべり災害が想定され、かつて被害が生じた地域も存在することから、警戒が必要とされる。雪崩に伴う斜面崩壊や土石流、および雪解け時の地下水の増加にともなう地すべりに対する備えが必要であろう。



昭和42年 羽越水害の様子
（菊地写真館提供）

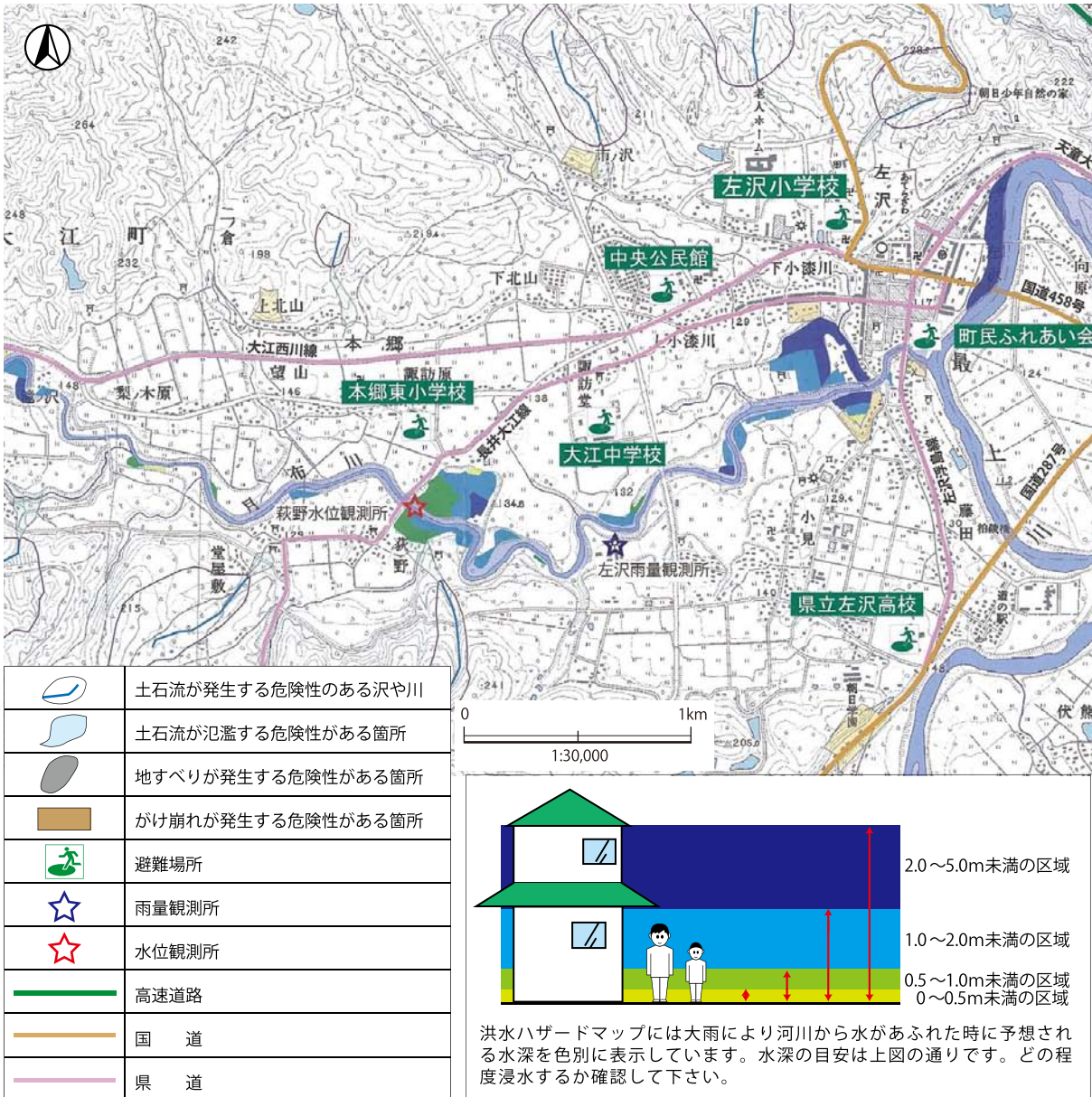


図3-14 大江町洪水避難地図（洪水ハザードマップ、2009年大江町）